

## 沈從文『辺城』論（一）

黄 媛 玲

### 一 序

沈從文は、その代表作『辺城』<sup>1</sup>（1934年1月より『國聞週報』に連載発表）を創作したきっかけについて、『従文小説習作選』序文「習作選集代序」（1936年1月『國聞週報』）において、次のように述懐している。

兩年前、我常見有人在報章雜誌上寫論文和雜感，針對著『民族文學』問題『農民』文學問題，而有所討論。討論不完，補充辱罵。我當時想：這些人既然知識都豐富異常，引經據典頭頭是道，立場又各不相同，一時必不會有什麼結論。即或有了結論，派誰來證實，誰又能證實？我這鄉下人正閒著，不妨試來寫一個小說看看罷。因此『邊城』問了世。<sup>2</sup>

沈從文は作家を志した当初から、主義主張の争いよりも実際の作品で成績を示すことこそ作家の本分であると主張しつつけたものだったが、この序文において、民族文学・農民文学とは何かを実践によって示そうとしたのが『辺城』という作品となったと明言したのである。また先に単行本『辺城』の「題記」（1934年4月）において、沈從文は読者に対して、「この民族が本当に好むもの、憎むもの、悲しむことと楽しむこと」「歴史的空間的に見たこの民族の長所と短所」「過去の農村と現在の農村」に関心を持ってじっくりとこの小説を読むべきだと呼びかけていた。本論文は、作家の示

峻に従って、民族の「愛憎」「哀楽」「長所と短所」、農村の「過去と現在」の変化がどこに描かれているのか注意深く観察しながら、『辺城』を読み直し、あわせて、作家が物語を作る際の出発点や物語の全体の舞台設定や細かい場面設定、ストーリーの展開と物語の結末に込められた意味を、他の作品との関連において考察し、『辺城』創作に至る過程の沈從文の精神世界を描き出すことを目標とする。

## 二 桃源郷

『辺城』の最初のページをめくれば、作品の舞台と登場人物が鮮明なタッチで、一枚の扉絵のように描かれている。

由四川過湖南去，靠東有一條官路。這官路將近湘西邊境到了一個地方名為「茶峒」的小山城時，有一小溪，溪邊有座白色小塔，塔下住了一戶單獨的人家。這人家只一個老人，一個女孩子，一隻黃狗。

四川と湖南の省境に位置する茶峒という砦（石の城壁に囲まれた山城）、砦の外をめぐる小河、小河のほとりに立つ白塔と、塔の下にぼつねんとある一軒の人家という書き出しからは、主人公の老人とその孫娘翠翠は俗世間と距離を置いた別世界の住民であるかのように感じられる。老人と少女は（そして犬までが）労働に参加し、交わす言葉は少ないが、生活は友情と信頼とユーモアに満ち溢れている。緑映える竹林に抱かれ花鳥に囲まれた豊かな自然環境、少女の葦笛と老人のしわがれ声の唱和、柔和さと潑刺とした明るさを兼ね具えた原始的宗教歌など、そこに描かれた調和の世界に、読者は幸福感に酔いしれてしまう。ほとんど民族共通の記憶となっている陶淵明『桃花源記』の伝説の地に程近い辺境の地に想像を馳せて、読者は武陵の漁師と同じような夢み心地になる。政治紛争を知らない平和な農村社会こそが中国人の理想とする世界であることを思い出し、心が潤い

に浸される。

しかし、沈從文は『辺城』を書いた目的は、桃源郷へ読者を旅案内するためではない、と誤解を戒めた。<sup>3</sup>

老人と翠翠は、桃源郷の住民のように世間から隔絶した場所で自給自足の生活をしているのではない。老人は、地方共同体の共同資金で設けた渡し舟の管理を任され、人々の生活の利便(交通の近道)を提供する役目を果たしつつ、生活に必要な糧をもらっている。地方政府の役人のあるべき姿をこの老人になぞらえたようにも感じられる。彼は、けっして舟の乗客からお礼の金を受け取ろうとしない謹厳実直さと乗客に対するフレンドリーな接し方で、茶峒の城内の人々とも良好な関係を保っている。老船頭の人生は、次のように書かれている。

管理這渡船的，就是住在塔下的那個老人。活了七十年，從二十歲起便守在這小溪邊，五十年來不知把船來去渡了若干人。…（中略）…他從不思索自己職務對於本人的意義，只是靜靜的很忠實的在那裏活下去。

自分の仕事が本人にとってどういう意義を持っているかなど考えたことがなく、生涯変わらずにただ忠実に仕事をこなし静かに生き続けている。「安分守己」という中国古来の庶民の人生観そのものである。

ところが、この桃源郷にも悲劇は起こる。それは、人間存在の原罪とも言うべき男女の恋愛にまつわる悲劇がいつの世に関わらず様相を変えて演じられるからである。翠翠の母親はその昔、未婚のまま子どもを身ごもってしまったが、彼女は孤独な父を置いて駆け落ちすることに決心がつかず、一方で、相手の男は軍人としての名誉を傷つけないために、逃げる行為よりも「死」を選ぶ事にした。男が服毒して死んだ後、胎児を殺すにしのびない母親は娘を産み落した後に、男の後を追って死んでいった。男女間の「義」の極致を「死」によって実現するという中国庶民の古来の価値

観をここに見ることができる。娘の代わりに孫娘を慈しみ育てた老人は美しく成長した孫娘の心の変化に気を配りながら、ふたたび男女をめぐる悲劇が起こりやしないかと心配する。しかし、少女が異性に対する「愛」と「性」にまだ目覚めておらず無邪気な子どもの心しか持っていないうちに、その「美しさ」に同時にひかれてしまった兄弟に悲劇が起こる。悲劇を挽回しようと苦しみもがく老人に「死」が訪れ、嘆き悲しむ少女の「明日」がどうなるか分からないまま物語が終る。

『辺城』の物語は、読者を桃源郷への旅行に誘うためのものではなく、人間関係のもつれあいが生じた時に、中国の田舎の凡夫愚民が感じるはずの、ごくありふれた「哀楽」を描き、それによって、人類にとって「愛」とは何かについて、「恰如其分」の（過度に強調もせず蔑みもせず、中庸を得た）解釈を加えることが目的だと作家自身は告白している<sup>4</sup>が、その意味をじっくりと考えることにしたい。

### 三 渡河與引路

さて、『辺城』を創作する際の作家の基本精神ともいうべき出発点を示唆してくれる場面が作品中にある。

有人從河街拏了一個廢纜做成的火炬，喊叫著翠翠的名字來找尋她，到身邊時翠翠卻不認識那個人。那人說：老船夫回到家中，不能來接她，故搭了過渡人口信來告訴翠翠要她即刻就回去。翠翠聽說是祖父派來的，就同那人一起回家，讓打火把的在前引路，

少女翠翠が兄弟のうちの弟雛送に初めて出会った端午の節句の日のこと。茶峒城内へお祭り見物に一緒に出かけてきた祖父が、祭りの楽しみを犠牲にして渡しの仕事を代わりにしてくれている友人に気遣って先に渡し場に帰ってしまったために、翠翠は(犬と共に) 龍船競漕の後の川辺に独り

取り残され、日暮れの闇の迫る中で心細い思いをさせられる。そこへ見知らぬ男が現れ、炬火たいまつを掲げて彼女を家へと導いてくれる。この場面の炬火を掲げた男のイメージは、周作人の「藹理斯的話」の中の次の一節を連想させる。

在道德的世界上，我們自己是那光明使者，那宇宙的順程即實現在我們身上。在一個短時間內，如果我們願意，我們可以用了光明去照我們路程周圍的黑暗。正如在古代火炬競走——這在路克勒丟思（Lucretius）看來似是一切生活的象徵——裏一樣，我們手里持炬，沿著道路奔向前去。不久就要有人從後面來，追上我們。我們所有的技巧，便在怎樣的將那光明固定的炬火遞在他的手內，我們自己就隱沒到黑暗裏去。<sup>5</sup>

男女の恋愛に関して、中国伝統の貞節観念に異議を呈し、性に関する新道徳観念をいち早く中国に紹介した周作人が繰り返し言及したエリスの言葉からの引用である。この一節の前半にみられるような性急な英雄主義・進化論的競争主義に沈従文はむしろ批判の目を向けていた<sup>6</sup>が、沈従文はこの一節の後半に強く共感したのであろう。これは、中国古代からある「傳薪」<sup>7</sup>という考え方と共通するものだが、沈従文とのつながりに即して考えた場合、もう一人重要な人物がいる。1931年に飛行機事故で早逝した詩人徐志摩である。『辺城』にこめられた思いについて多く語った『従文小説習作選』の序文に、沈従文は、もしも読者が自分の作品から力や喜びを得たならば、徐志摩への敬意と感謝を表すべきだと言った。その言葉には、この「傳薪」のイメージが使われている。

從他那兒我接了一個火，你得到的溫暖原是他的。

火種を次の世代に手渡しすること、そこに生命のむなしさを解消する永続の意義を見出したのであろう。ここで、沈従文は、徐志摩から手渡され

た生命の火の輝きではなく、暖かさを強調した。

さて、この場面と主人公老船頭の仕事を合わせ考えれば、さらに「渡河與引路」という別の文章のタイトルが浮かび上がってくる。『新青年』の編集に当たっていた銭玄同に宛てた魯迅の手紙（『新青年』第五卷第五號、1918年10月）に付けられたタイトルだが、Esperanto を使うべきかどうかの討論に対して意見を述べたものである。

依我看來，人類將來當有一種共同的語言；所以贊成 Esperanto ㄗㄗ

至於將來通用的是否 Esperanto，卻無從斷定。---(中略)---但現在既是只有這 Esperanto，便只能先學這 Esperanto。現在不過草創時代，正如未有汽船，便只好先坐獨木小舟；倘使因為豫料將來當有汽船，便不造獨木小舟，或不坐獨木小舟，那便連汽船也不會發明，人類也不能渡水了。

但我還有一個意見，以為學 Esperanto 是一件事，學 Esperanto 的精神，又是一件事。——白話文學也是如此。——倘若思想照舊，便仍然換牌不換貨---(中略)---所以我的意見，以為灌輸正當的學術文藝，改良思想，是第一件事；討論 Esperanto，尚在其次；至於辯難駁詰，更可一筆勾銷。

新青年里的通信，現在頗覺發達。讀者也都喜看。但据我個人意見，以為還可酌減。只須將誠懇切實的討論，按期登載；其他不負責任的隨口批評，沒有常識的問難，至多只要答他一回，此後便不必多說，---(中略)---和他分辯，我們就錯了。一是覺得歷來所走的路，萬分危險，而且將到盡頭；於是憑著良心切實尋覓，看見別一條平坦有希望的路，便大叫一聲說，「這邊走好。」希望同感的人，因此轉身，脫了危險，容易進步。假如有人偏向別處走，再勸一番，固無不可；但若仍舊不信，便不必拼命去拉，各走自己的路。因為拉得打架，不獨於他無益，連自己和同感的人，也都耽擱了工夫。<sup>8</sup>

エスペラントを白話文学に置き換えて考えても同じで、表現道具が何で

あれ、もっとも大切なことは、正しい学術・文芸の導入と思想の改良であると言っているのは、もっともである。「渡河與引路」は、言わば五四運動の主導者たちの果たそうとした役割を表す言葉であった。

この文章において魯迅は、そのような大切な役割を果たすべき『新青年』の編集方針について進言している。論争などは簡単にひと言であしらい、時間を浪費せずに、通信欄は誠実な意見のみを載せ、非常識・無責任な批評を相手にする必要はない、と言っている。先の『従文小説習作選』の序文はこれと相呼応し、『辺城』執筆時の文壇の喧騒に対する沈従文の考えをここに見ることができる。『辺城』の創作の着手に際して、沈従文は『新青年』時代の魯迅のこの発言を想起して文壇への批判を作品の中に潜ませ、「渡河」と「引路」の役割を作中の二人の登場人物に分担させた。『辺城』のテーマが「渡河與引路」であることに、当時の読者はすぐに気づいたのかもしれない。その証拠に、魯迅は、『辺城』が発表された同じ1934年の12月に『集外集』を編集させているが、その中に1918年に書いた「渡河與引路」の一篇を収めている。魯迅が『集外集』の序文に、「我對於自己的“少作”，愧則有之，悔卻從來沒有過。」（私は自分の若い時分に書いたものに対して、慙愧の念こそあるが、後悔したことはない）と言ったのは、1934年における魯迅の反省の弁であろうか。沈従文が湖南から北京に出た当初に見た1925年前後の北京文壇の様相を振り返れば、孫伏園と周作人などが編集者の立場を利用して『晨报副刊』『語絲』において議論を巻き起こすために通信欄を多めに利用したことを想起させる。そして、その態度は『新青年』の通信欄における議論の真剣さとは違い、特定の個人の中傷・嘲笑に走る傾向が多くあった。<sup>9</sup>文壇の様相に肝を冷やして、創作に嫌気をさした人もいた、と沈従文はのちに述懐している。しかし、沈従文は『辺城』の執筆にも見られるように、文壇への批判を創作の原動力に転換するのが常であった。彼はかまびすしい騒音の中でもまるで別世界の住民であるかのようにこつこつと仕事ができるのである。

「渡河」という言葉から簡単に連想されるものには、陸志韋の詩集『渡河』（1923年）がある。陸氏の新詩の創作における努力は、『中国新文学大系・詩集』の朱自清の「導言」（1935年）によって知ることができる。

新詩形式運動的觀念，劉半農氏早就有。---（中略）---。第一個有意實驗種種體制，想創新格律的，是陸志韋氏。他的『渡河』問世在十二年七月。他相信長短句是最能表情的做詩的利器；---（中略）---那時『國語新詩韻』還沒出，他根據王璞氏的『京音字彙』，將北平音併為二十三韻。這種努力其實值得欽敬，他的詩也別有一種清淡風味；<sup>10</sup>

沈從文はそれより先に「我們怎麼樣去讀新詩」（1930年10月『現代學生』創刊號）という一文の中で、陸氏の功績について述べている。

陸志韋詩雖在讀者中不甚發生影響，對其渡河一集發生興味的，不是讀者倒是當時的其他作者。

陸の詩は、読者の高い関心を得ることはできなかったが、中国の宋代の詞と伝統的な韻を踏まえながら、それにこだわらず、平仄・韻の使用を規定しない自由な考えをもとに、新詩草創期の他のどの作者よりも大胆な実験を試み、次の世代の詩作者に対して影響を与え、それがのちの新詩の黄金時代を築いた新月派聞一多らの新詩運動へとつながっていく。また、聞一多の詩を論じた「論聞一多的死水」（1930年4月『新月月刊』第三卷第二期）において、沈從文は次のように言っている。

死水不是「熱鬧」的詩，那是當然的，過去不能使讀者的心動搖，未來也將這樣存在。然而這是近年來一本標準詩歌！在體裁方面，在文字方面，死水的影響，不是讀者，當是作者。---（中略）---在將來，某一時節，詩歌的興味，有所轉向，使讀者，以詩為「人生與自然的另一解釋」文字，



使詩效率在「給讀者學成安詳的領會人生」，使詩的真價在「由於詩所啓示於人的智慧與性靈」，則死水當成爲一本更不能使人忘記的詩！

沈從文の文学批評に共通することは、読者の間の一時的な人気の高さよりも、次の世代の創作者に与える影響（＝「傳薪」）を重視したことである。そして、西洋の作詩法を中国に導入するのみならず、新文学と伝統文学を対立させることなく、中国韻文の伝統を活用することに成功した彼らの仕事は、「渡河」（橋渡し）の役割を果たしているとも言うべきものである。そして、「傳薪」といえるほどの実力の高さ・作品の質の確かさは人生について深く考えようとする読者によって、存在意義を永く保つことができると言っているのである。

#### 四 「忘我」と「無私」

1949年、新しく成立する政治制度の下では創作に対する作家自身の信念を貫くことが不可能だと予見し、すでに自ら命を絶つ用意があったのか、沈從文は、二十数年間の創作の道程を振り返った、非常に重要な自伝的文章をいくつか書いた。「杜鵑吐血」という言葉を想起させるほどの、ありったけの心情の吐露には、『辺城』の創作に関する重要な告白が多く含まれていた。

それは『従文自伝』の続篇とも言うべき「一個人的自白」（1949年2月手稿）である。その中で、『辺城』の主人公老船頭のモデルについて、次のように語っている。

到平半年唯一古道友情陌生的幫助，還是住西城時一個每到黃昏即搖鈴鑼串街賣煤油的老頭子。因爲買油熟習，過年時借過我兩百銅子，度過了一個年關。這就是邊城中的老祖父，我讓他爲人服務渡了五十年船。並把他的那點好意，擴大到我作品中，並且還擴大到我此後生命中，想盡一

切辦法幫助年青人，<sup>11</sup>

湖南から北京に出てきた直後の困窮した生活の中で、正月が過せるようにと二百文の銅銭を貸してくれた油売りの老人、その人を老船頭のイメージにしたという。沈從文は、僅か二百文の銅銭が彼のその後の人生に果たした役割は計り知れないものであると言っている。「他人に対するちょっとした親切心」を沈從文は自分の創作を通して拡大させ、彼自身の生き方に拡大させ、若者に接する時に、その親切心を生かしつづけた。そして、『辺城』においては、その親切心を五十年間の「渡河」の仕事に拡大して表現したのである。

私たちは、この告白のほかに、沈從文の最初期の作品「公寓中」（1925年1月発表）の中に、この灯油売りの老人の姿を見ることができる。

燈罩子也「乘人之危」，只輕微地同桌角一碰就碎成了各種不規則小片了。---（中略）---

賣煤油那老老來時，竟自動要借我錢——買罩子以後還可以到十五回圖書館取暖的數目——我並不疑心他因每天用油的原故才如此慷慨，但終于拒絕他了；雖然是很和氣的說。

心中終於有點抱歉，他真可憐，他的確太好了！<sup>12</sup>

ところで、沈從文は、「一個人的自白」の中で、この老人と対照的な人物のことを次のように書いている。

相對照是我把所有初期作品上百篇，向一個著名副刊投稿時，結果卻只作成了一種笑話傳說，被這位權威編輯，粘接成一長幅，---（中略）---一齊揉入字紙簍裏。這另外一種現實教育，這對我的侮辱，---（中略）---爲了否定它，也就把我永遠變成一個理想主義者，一個“吉訶德”！凡曾

經用我的同情和友誼作渡船，把寫作生活和思想發展由彼到此的，不少朋友和學生都萬萬不會想到，這隻忘我和無私的抽象渡船，原是從一種如何“現實教育”下造成的！我如不逃避現實，聽狹隘的自私和報復心生長，二十三年後北方文壇的發展和培育，會成什麼樣子？

文学創作の生涯を通じて驚異的で精力的な仕事をした沈從文が文壇に接して最初に受けた衝撃は、『晨報副刊』編集者孫伏園の彼に対する侮辱であった。この事件について、晩年にアメリカに招待されプリンストン大学で行った講演の中でも言及していることは、この事件の沈從文の自尊心への打撃の大きさを物語る。<sup>13</sup>沈從文の初期原稿の多くは、日の目を見ないまま編集者の手で捨てられてしまったという。その教訓から、沈從文は自身が編集者になった時に、不採用となった原稿は必ず本人に送り返すことにしたという。

上記引用の「一個人的自白」の中で、沈從文は友人や学生に友情と同情を与えることによって、その生活と思想を変えた自身の行為を「忘我」と「無私」という抽象的渡し舟」と表現している。彼にとって、「渡河與引路」の役割を果たす人は、自身の利害を度外視し、派閥の垣根を越えて公平な態度で他人に接することのできる人でなければならないのである。派閥争いが中国現代文学の進展、いや中国現代社会にもたらした禍害の大きさに思い当たった時、「杜鵑吐血」の心情が想像できよう。

批評家の中で、沈從文が自分を僅かに理解できた一人として言及している劉西渭（李健吾）は、『邊城』の登場人物について次のように批評しているのが沈從文自身の言葉と呼応している。

他們心口相應，行爲思想一致。---（中略）---對於生活沒有過分的奢望，他們的心力全用在別人身上：成人之美。---（中略）---無不先有人而後——無己。  
（『咀華集』「邊城」）<sup>14</sup>

## 注

- <sup>1</sup> 『辺城』改訂本 1943年9月開明書店初版1949年五版、以下本論文における引用はこれに拠る。『沈從文全集』8(以下『全集』と略す)2002年北岳文芸出版社参照。
- <sup>2</sup> 『從文小説習作選』「習作選集代序」、1945年6月再版、上海良友図書公司、1990年上海書店影印本
- <sup>3</sup> 同上『從文小説習作選』「習作選集代序」
- <sup>4</sup> 同上『從文小説習作選』「習作選集代序」
- <sup>5</sup> 「藹理斯的話」1924年2月23日『晨報副刊』
- <sup>6</sup> 黄媛玲「失われた時を求めて—沈從文の日記体小説「篁君日記」における「恋愛」—」『野草』88、中国文芸研究会2011年8月参照
- <sup>7</sup> 「傳薪」(『莊子』内篇養生主篇第三、福永光司・興膳宏訳・ちくま学芸文庫、2013年、第105頁)
- <sup>8</sup> 『新青年』合訂本第5巻、第523頁、上海書店影印、1988年
- <sup>9</sup> 『顧頡剛日記』第1冊1924年1月21號第446頁 聯經出版事業、2007年。『語絲』1925年～1926年、1982年上海文芸出版社影印本
- <sup>10</sup> 『中国新文学大系・詩集』「導言」(1935年)第6頁、上海文藝出版社影印本、1982年
- <sup>11</sup> 「一個人的自白」『全集』第27巻第18頁 簡体字を繁体字表記に変更。
- <sup>12</sup> 「公寓中」『晨報副刊』1925年1月30日原載、『全集』第1巻第354頁
- <sup>13</sup> 「二十年代的中國新文學」『全集』12、第380頁
- <sup>14</sup> 『咀華集』「邊城」1936年12月初版、1947年三版、文化生活出版社